



適正な水管理

〔出穂前後各3週間の湛水管理と早期落水防止〕

出穂期前後は、水稲が一生で最も多くの水を必要とする時期です。稲は水が不足すると、十分に光合成ができず、白未熟粒や胴割粒の発生が増加しますので、早生品種（コシヒカリ、キヌヒカリ）では8月中旬・下旬頃まで、中生品種（秋の詩、日本晴）は9月上旬頃まで湛水管理を実施しましょう。また、稲は成熟期まで水を吸い、穂へ養分を送るため、落水が早すぎると粒の肥大が不完全になり、茶米、死米、胴割粒が発生します。近年は、夏季が高温になりやすい傾向にあり、胴割粒が発生しやすくなっていますので、収穫予定の5日前までは長靴の足跡がはっきりつくぐらいにはほ場の水分を確保しておきましょう。

適期収穫（刈り遅れない）

近年、出穂後の気温が高く、登熟日数が短くなる傾向にあります。（別表参照）

出穂後30日を過ぎたら収穫できるよう準備をする必要があります。

登熟日数の比較（農業技術振興センター作況試験データより）

| 年次 | 品種名 | コシヒカリ | 日本晴 | 秋の詩 |
|-------------|-----|-----------------|-----------------|-----------------|
| 昭和61年～平成15年 | | 37日 (32～40日) | 41日 (34～49日) | — |
| 平成16年～平成25年 | | 33日 (30～37日) | 37日 (32～40日) | 39日 (34～44日) |

※（ ）内は各期間の最小～最大日数。「日本晴」の平成16～25年は平成16～22年の7年間。（例）コシヒカリは5月10日に移植。7月27日に収穫したら、刈取時期は8月30日が目安となります。



キャベツの夏まき栽培

温暖地で8月に植え付けるキャベツの栽培を夏まき栽培といいますが、夏まき栽培は、暑さや病害虫の対策が大変で、一見難しそうですが、生育の後半は、冷涼な気候を好むキャベツの生育適温期に入ります。適期に種まきをすれば、厳寒期の前に収穫を終えることができます。

ベランダ栽培では園芸店や農家から苗を購入して始めるのが良いでしょう。コンテナにじかまきする方法もありますが、この場合は7月下旬から8月上旬の間に種まきをしたと間に合いません。品種は小型で生育が早い年内収穫用を選び、初心者にはミニキャベツがおすすめです。

キャベツの成長と結球は、コンテナの大きさと関係するので、球を大きく育てたいときは深さ30cmくらいの深型にしますが、深さ20cm弱の標準型のコンテナでもそれなりの大きさに育ちます。株と株の間は20cmぐらい開けて植え付けるので、縦横が60cm×20cm程度の標準的なコンテナでは1条植えて、1コンテナ当たり3株です。じかまきするときも株間や本数は同様

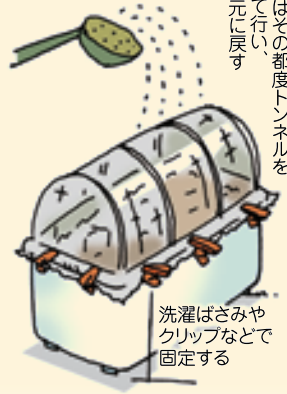
手軽にできる有機ベランダ栽培

で、1カ所3〜4粒を点まきし、間引きを行いながら、本葉4〜5枚の時期に1本にします。

追肥はぼかし肥を使い、植え付け後10日目に1回目を行い、その後20日ごとに1回、1株当たり10gを施します。水やりは適宜行いますが、結球が始まったら特に多めにします。これとは別に、油かすを株の周辺の土面と外葉の葉面に1株当たりひとつまみ（3g）ずつ、パラパラとまきます。

防虫対策として、コンテナをサンネットが不織布でトンネル状に被覆すると効果があります。虫が裾から入らないように、裾をコンテナの縁に折り返してから固定します。トンネルは11月になったら外して太陽の光を十分に与えます。また、ある程度の寒さに当たった方が甘味も増します。

水やりは被覆の上から行う



追肥はその都度トンネルを外して行い、再び元に戻す

洗濯ばさみやクリップなどで固定する